

## 永井隆先生が下さったひとつの奇跡

国立精神・神経センター国府台病院  
湯 浅 龍 彦

その患者さんが外来にこられたのは長崎原爆記念日が間近に迫ったある夏の日であった。娘さんが車イスを押して診察室に入ってこられた。パーキンソン病なのですが、今度郷里からこちらに出てきて一緒に暮らすことになったので診てほしいとのこと。それに、母はもう何年も前から一人では歩けないのですと…。

「どこから来られました。」

「長崎から…」

「では永井先生でご存知ですよ」

「???どこの永井先生ですか」

「いや、長崎の名誉市民第一号であられた、永井隆先生ですが」

その時、患者さんの目がキラリと輝いたように思えた。

「ええ、知っています。私、先生と一緒に働いたので。」

「え！本当ですか、あなたのご存知の永井先生のことを私に話して頂けませんか。どんな先生でした。体格は大きかったですか…。実を申しますと私は以前長崎に行った時に永井先生のことを知り、私の郷里のご出身で、学校（とはいっても旧制松江中学校）の先輩でもあることなどを知りまして、以来、心密かに尊敬していた先生なのです。それに大正8年のことですが、私の親戚のものが、永井先生と中学の同級であり、永井先生は長崎医大へ、この方は九州医大へ進まれたのですが、残念なことに、永井先生は長崎で、この方は広島日赤で被爆して亡くなられたのですよ。それで、私も永井先生のことを気になって、本を読ませて頂いたりして、そのお人柄に感銘を受けていたもの一人なのです。」

「先生！実は私も被爆したのです。永井先生とはあのあと一緒に長崎市内を救援活動して歩き、私は永井先生の指揮下で一緒にさせて頂いたのです。」

「そうですか、ところで今度あなたがこられたここ市川市は、永井先生ともご縁がある土地柄なのですよ。と、いいものは、後年永井先生の出版のことや叙勲のことでお骨折りをなさったのが、実はこのすぐ近くに山下清で有名な病院があるのですが、その式場先生ご兄弟でして……。」

それを機に患者さんは、次々と、当時の長崎の様子や救援活動のことをお話しなされ、通常の診察時間をはるかに超過してしまっただ。

「それでは、今日はこれ位にして、前のお薬と同じものを出しておきますので、また来月おいで下さい」ということでその日は帰って行かれた。

翌月、〇〇さんとお呼びすると、何とその方が歩いて入室なさるではありませんか！「えー、どうしたのですか？」

娘さん曰く、「先生、実は先回、母があんなに原爆のことを話すのを聞いたのは、私の記憶でも初めてなのです。母があんなに話すなんてびっくりしました。それからです、母が自分で歩くようになったのは……。」

「えーそうですか、でも今までも薬は飲んでおられましたよね」

「勿論、薬は同じです。」

「母は胸につかえていたものがとれたようです。」

「そうですか。驚きましたね。もしそうだとすれば、これはきっと永井先生が私達を助けて下さったのでしょね。」

その患者さんの表情から陰鬱な影が消えていた。今夏もまた長崎と広島原爆記念日が巡ってくる。多くの先達の努力と犠牲の上に今日の社会がある。今、医療を取り巻く現場は大きなうねりに巻き込まれようとしている。原爆からの再建を考えれば今の困難は何程のこともなからう。

本誌「医療」が今世紀の医療の方向性を示す羅針盤となるよう期待するのは著者のみではないであらう。